

特集 シンポジウム報告

おわりに——ディスカッションと今後の展望

平野葉一 東海大学文学部文明研究所

今回のシンポジウムでは、基調講演の代読という変則的な形ではあったが、各講演後および最後のディスカッションに際してさまざまなコメント、質疑応答が行われた。

岡本光之氏の基調講演（代読）では、環境に対する環境省の取り組みに対する理解が深まったという意見もあり、とくに SATOYAMA が日本の名古屋会議での発信であると同時に世界にも多くの SATOYAMA が存在すること、ならびに、伝統知を基盤とする「SATOYAMA イニシアティブ」なる考え方の貴重さへの評価が見られた。

中嶋卓雄氏の関連研究報告では、科学技術を基調とする現代文明の展開がともすると考え方という点でも画一化、均一化をもたらしているのではないか、その意味で多様性という視点からも bricolage 的な発想が必要ではないかという点が示された。これに対し、現在起こっている事がらに対してはその必要性は納得できるが、将来起こるであろう事がらに対して最初から bricolage 的な発想は可能かという質問が提起された。この問いに中嶋氏は、現在のコロナウィルスへの対策を考えてみると、将来が見通せない場合にでもいくつかの失敗を根拠にして手持ちのリソースで対処していくところにこうした考え方が有効性を発揮する要素があると指摘がなされた。

田中彰吾氏の関連研究報告では、自然と地域の関係性が自然を対象とする生業によって保たれていること、逆に震災対策が海と陸を分断し過ぎることで循環するエコシステムのなかでの生業が行き場を失うことが指摘され、里山、里海のランドスケープを尊重することが sustainable な里山維持につながるということが論じられた。これに関しては、地域の住民すなわち自己にとってのランドスケープの重要性に対し、それが外部の人々すなわち他

者にとってどのような意味をもつのかという質問が提起された。これに関しては、田中はその点が重要ではあるが難しい問題であるとしながらも、地域によっては観光などの取り組みも検討され、環境保持—ここでいうところの里山、里海のランドスケープの保持—が自己と他者で共有されることが重要であるとの指摘がなされた。また、この研究報告に対し、環境経済学という視点もふまえると、ともすると環境の議論は経済の足を引っ張ることもあり得ると考えていたが、むしろ環境問題への対応が経済を発展させる可能性があることを実感したという意見も出された。その点では、現在環境省が進めている地域循環共生圏の検討も、都市部と山間部の共生を考えるという点で今回の議論につながるということが確認された。

全体をとおしては、コーディネータの平野から、今回の基調講演および二つの関連研究報告に共通しているのは、「人々の経験に根差した知」の存在ではなかったかという指摘がなされた。すなわち、岡本氏の「SATOYAMA イニシアティブ」に見られる伝統知にしても、田中氏のランドスケープに内在する暗黙知にしても、それは地域の人々の長い経験によって培われた「経験知」であるからである。そして、それは、レビ＝ストロースが古代人を「器用人」と称した「知」、つまりは中嶋氏が指摘した bricolage の原型につながる。この問題に対し、中嶋氏は、ランドスケープがある意味で視覚的要素であると同様に、人々の感覚が養ってきた多様な知に新たな可能性が見出されるのではないかと、将来的な議論の方向性を提示した。また、田中氏からは、自然との関わりのなかでのランドスケープには地域の暗黙知が宿っているはずであるが、人々がそれに気がつかないまま科学技術の施策などによって消え失せてしまうこともあると指摘

がなされた。

今回の主題である環境問題をグローバルに考えた場合、ランドスケープは決してローカルな問題にとどまらず、おそらくは人間が宇宙から地球を眺めた50年ほど前から地球規模の環境問題への意識が高まり、全体的な視野の重要性が問われるようになったのではないだろうか。Anthropocene（人新世）もその延長線上に捉えられるのではないか（田中氏）。また、この問題はそれほど単純ではなく、むしろ人間の経済活動とも絡んでさまざまな要素を含むので、地域の問題だけではなく、自然という大局的な見方という点でも、今以上に情報の共有が可能になる教育の展開などが必要になってくるのではないだろうか（中嶋氏）、といった補足やまとめがなされた。

環境の問題に関しては、地域の人々の意識や彼らの生業を自然との関わりのなかで検討することが大切であるが、同時に、地球規模での視野を養うことも重要である。その鍵になるのは、人々の意識であり、そしてそれを生じさせてきた「知」—伝統知や暗黙知—ではないか。環境省が推進している「SATOYAMA イニシアティブ」の底流にあるのもそうした「経験知」である。環境問題は、経済的問題、地域の人々と行政の関係、地域格差などさまざまな要因を含むが、そうした複雑さは、17世紀に科学を手にし、18世紀の産業革命を経て築かれてきた現代文明に課された課題なのである。今回のシンポジウムで提起された問題点が、文明研究所における今後の研究の一つの足掛かりとなれば幸いである。